中学生の部　最優秀賞

『笑顔があふれる場所』

旭中学校　2年　手塚（てづか）　莉桜（りお）
（現3年）

私の祖父は、私がまだ幼い頃に、事故に遭いました。そして首から下の上半身が動かせなくなり、歩くこともはみがきや食事もほとんど一人でできなくなりました。それから祖父は介護施設で生活することになりました。

そんな祖父の生活を支えたのは、介護施設の方々でした。

祖父は介護施設の方々に心から感謝しています。私が物心ついて、祖父が生活している施設に行ったとき、ここは本当に介護施設なのかと疑うほどでした。スタッフさんと看護師さんたちだけではなく、入所者の方々も皆笑顔に包まれていました。私は祖父母の家に来ているような気持ちになっていました。

それから数年経ったある日、私はふと祖父に尋ねてみました。

「ここって楽しいの？」

すると祖父は笑顔で、

「家にいる時みたいに楽しいよ。ここにいるスタッフさんは、私たちを患者としてではなく、一人の大人として接してくれるんだよ。」と答えました。まわりを見渡してみると、スタッフさんと楽しそうに話している入所者の方々ばかり。私にはまるでディズニーランドのように見えました。本当にすごいなと思いました。そして、かっこいいとも思いました。

もしもスタッフさんや看護師さんたちがいなかったら、祖父の人生はどうなっていたのでしょう。もちろん事故に遭ってしまったのは不幸な出来事だと思います。しかしそこから救ってくれたのは、その施設の方々の力が大きいです。

それから、家族の存在も欠かすことはできません。家族がいたからこそ、リハビリをがんばることもできたと思います。特に祖母の支えが一番だったと思います。私の目に映る祖母は祖父に同情ではなく、優しさを毎日プレゼントしています。祖父はよく口にしています。

「おじいちゃんはおじいちゃんでよかった。こんなに幸せなんだから。本当にありがとうね。」と。

私の将来の夢は、パティシエになることです。祖父を笑顔にしてくれた施設のスタッフさんたちのように、食べた人皆を笑顔にできる、そんなパティシエになりたいと思っています。

ある時、祖父がそばにいる祖母にこう言いました。

「ありがとう。これからもよろしくね。」

祖母は笑顔で祖父に言いました。

「当たり前でしょ。」

私は心があたたかくなるのを感じていました。